

ほこりを取除くと、本物が見える

ルカ21:5～19 / 李正雨師

誰にも誇りにするものはあると思います。ある人にはお金や名誉が誇りになり、ある人には、学閥や人脈などが誇りになります。立派に成長した子供や弟子が自分の誇りになったり、研究の結果や成果などが誇りになることもあります。これは国と民族にも同じですが、おのおの誇るものが一つずつはあるはずだと思います。日本の誇りは何があるのでしょうか。比較的安定した経済、製造業、基礎科学、寿司、アニメなどがあるでしょう。では、韓国の誇りは何があるのでしょうか。急に成長した経済、IT科学、K-POP、ドラマ、キムチなどがあるでしょう。このように私たちみんなには誇るものがあり、それを喜びと幸福として思うこともあります。しかし、これらの誇りが私たちのままと代表したり、私たちのすべてになったりするものではありません。むしろ、このような誇りによって、隠されることが多くあります。本当に申し訳ありませんが、現在の日本は幸せな国ですか。自殺率、離婚率、低い出産率と高齢化、イジメなど自慢できないものが多いです。そして韓国は、このような日本と肩を並べています。すでに自殺率と低い出生率は、日本を超えています。今はいろいろな誇りで包んでいますが、いつか誇りが消えたら、真実が見えるでしょう。

今日、私の説教のタイトルは「ほこりを取り除くと、本物が見える」です。ここで「ほこり」は二重の意味を持っていますが、一つは自慢の誇り、もう一つは塵のほこりです。この二つは、共通点がありますが、それは「ほこり」を取り除くと本物が見えるということです。先に自慢の「ほこり」について申し上げましたので、塵の「ほこり」も申し上げます。1875年コンスタンティノーブルの修道院の図書館で埃に覆われた写本一冊が発見されます。この本の表には「ディダケー (Διδαχή)」と書かれており、続いて「十二使徒を通して民に施された主の教え」という長いタイトルが書かれていました。この本は、1世紀末シリアのある教会で使われたものとして、当時の教会の教えと礼拝、信仰生活の規範などが書かれていました。この写本によって、以前はまったく知られなかった初代教会の状況を推測することができました。この本は礼拝、特に聖餐式に大きな影響を与えるようになります。ほこりを取り除くと本物が出てきたのです。

今日の福音書の教えもこの「ほこり」についての言葉です。今日の福音書はこう始まります。5～6節の言葉です。「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」当時イスラエルにも誇りがありました。ソロモンの神殿よりも華やかに増築された神殿、つまりヘロデ神殿でした。ヘロデ神殿はソロモン神殿より大きくて、神殿の壁や神殿の丘の大きさも大きかったです。さらに、ヘロデはこの神殿を増築するために各国の王と貴族、金持ちから奉納物を受け取ったそうです。当時の歴史家ヨセフスによると、神殿の入り口は白い大理石、屋根と門は黄金、神殿はあらゆる宝石で飾られていたそうです。この神殿は、何十年にもわたって補修され、補修のために貧しい人にしろ、お金持ちにしろ、すべての人に献金を強制しました。当時の人々はこのように建てられていく神殿の壮大さと美しさを誇りと思い、神様の祝福だと思いました。しかし、イエス様はこの神殿が崩壊することをおっしゃいます。これは、この神殿が真理を隠し、民の膏血の上に建てられたものであったからです。

しかし、ユダヤ人にとって神殿が崩れるというのは、単に宗教的な改革だけを意味するものではありませんでした。過去にもユダヤ人の神殿が崩れたことがありました。神殿が崩れたとき、ユダヤ人は国を奪われ、数十万人が捕虜になりました。法律と秩序は消え去り、略奪と暴動などによってすべてが乱されました。このような歴史を持っているユダヤ人たちに、神殿が崩れるという言葉は、終末が来るという言葉と同じでした。それで、7節の言葉のように、イエス様が神殿が崩れることを言われると、人々はどんな徴があるのかを尋ねたのです。イエス様は、徴として偽メシア、戦争、暴動などが起こることをおっしゃいます(8節)。しかし、これらのことは世の終わりではないと言われます(9節)。より多くのことが起こり、このことによってご自分に従っている人々が害を受けると言われます。今日の福音書10節にはこのように書かれています。「そして更に、言われた。『民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。』」

民族が民族に敵対するというのは、AD66年に起きた熱心党の反乱を意味すると思います。当時、ユダヤに

はローマに対抗するテロリストがいましたが、彼らを熱心党又はゼロテ派と呼びました。彼らは短剣を持ってローマ人や親ローマ人を対象にしてテロを行い、勢力が大きくなると、革命を起こしてローマ軍を退け、神殿を占めました。この過程で、彼らはローマの兵士だけでなく、多くのユダヤ人の貴族とサドカイ派の人々を殺しました。イエス様がおっしゃった民が民に敵対するというのは、これを意味するのだと思います。そして、国が国に敵対するというのは、ローマと神殿を占めた熱心党との戦争のことだと思います。熱心党に負けたローマは、すぐローマ軍をユダヤに送ります。この戦争は4年間続きましたが、結局ローマが熱心党に勝ち、エルサレムを奪い返します。この時、約百万人のユダヤ人が殺され、数十年間増築、補修されていたエルサレム神殿もすべて崩れます。そして歴史家ヨセフスによると、エルサレムが滅ぼされる前、11節のこと、すなわち地震と飢饉と疫病が起きたそうです。

AD70年、すべてをローマに奪われたユダヤ人は、ローマの皇帝を神として崇めることも強制されます。この過程で強制の対象となったのは、ユダヤ教だけではありませんでした。イエス様に従っていたユダヤ人、つまりキリスト教も強制の対象になりました。特にキリスト教徒は、皇帝を神とは思わず、異教徒とは交わらなかったのが、キリスト教に対する迫害は日々激しくなりました。また、ローマは自分の帝国で皇帝を崇めない宗教的な集会を禁止しました。他の宗教的な集まりは、ローマの平和を脅かすからだという理由でした。これによってキリスト教徒たちは、地下の墓地に集まって礼拝を捧げましたが、これがカタコムと呼ばれているものです。しかし、これも人々によって誤解されます。キリスト教徒がカタコム、地下の墓地に集まり、子供の肉と血を食べるという誤解でした。これは聖餐式を誤解したことでしたが、ローマはこれを盾に、迫害に拍車をかけました。このような誤解と迫害によって、ユダヤ教とキリスト教は完全に分離され、信仰に熱心なキリスト教徒は、命を奪われました。この過程で12節以下の言葉、民族と親戚と家族による迫害が起きたのだと思います。

しかし、このようなことは真理、神の言葉を妨げることができませんでした。むしろ神殿が崩れるなど自慢することが消え去ると、人々は本質に集中し始めました。ローマの迫害は、人々の信仰をより深くし、徹底した信仰生活をするようにしました。先ほど申し上げました、ほこりが覆われたまま発見されたディダケーを読んでみると、初代教会の人々がどれほど最善を尽くして信仰生活をしたのかが分かります。ローマの迫害の中でも1日3回祈り、週に2回断食しました。洗礼を受けるためには2年以上がかり、軍人のような人を害する職業を持っていたら、仕事を辞めなければなりませんでした。奉仕と分かち合いのために、自分が持っているものを出さなければなりませんでした。このようにキリスト教徒になるのは、容易ではありませんでした。自分のためのものを諦めなければならなかったし、誇るものは何もありませんでした。むしろ、キリスト教徒だと言えば、迫害を受けたので、自分の善い行いを隠さなければなりませんでした。しかし、このような状況や迫害の中でも教会は無くなりませんでした。そして313年、キリスト教はローマの宗教の一つとして認められ、迫害も止まりました。

また今日の福音書、神殿の話に戻りましょう。当時のイエス様が神殿の崩壊を予告されたのは、何を意味したのでしょうか。神殿によって真理を見られない人、自分の誇りによって神様の言葉を悟らない人たちのための言葉ではないのでしょうか。ほこりは本質を隠します。本物が何なのか、見えないように、知らないようにします。それで神殿は、崩れなければなりませんでした。ほこりが取り除かれないと、本物が見えないからです。ヨハネの手紙一2章16節にはこう書かれています。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです(新改訳)。」ほこりはこの世のもの、神様のものではありません。

AD313年以降、キリスト教はますます成長し、392年にはローマの国教になります。そして国教になったキリスト教は、再び人々の誇りになりました。皆様、人々の誇りになったキリスト教はどうなったと思いますか。キリスト教は、政治によって分けられ、十字軍戦争を起こし、宗教改革の対象になりました。だから、誇りは取り除かなければならないのです。ほこりを取り除き、本物を見る皆様になりますように。神様が皆様を真理の道に導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン